

東北大災害科学国際研初代所長 平川教授に聞く

文理共同 新しい視点へ

東北大が4月に新設する「災害科学国際研究所」の初代所長に、平川新教授(61)が就任することが決まった。東日本大震災の教訓を強力な防災につなげるため結集する頭脳をリードする。研究所の理念や目標を聞いた。

(聞き手は報道部・東野滋)

――1面に関連記事

――研究所の使命は、

「震災は想定されていた宮城県沖地震をはるかに超える巨大災害だった。従来の研究の限界を克服し、災害に強い社会をどう実現するか。世界最先端の研究拠点を設け、国内外への貢献を目指すのは、これだけの被害を受けた地の総合大学の責務だ」

――文系、理系の垣根を越え研究者が集まった。

「災害への対応策を考えるには、多くの側面からの研究が必要だ。アプローチは異なっても、力を結集すれば、個別では不可能だったことが可能になる。研究者が互いに研究内容を持ち寄り、アイデアを出し合うことで、共同研究の新しい視点が生まれればいい」

「私の専門は歴史学だが、各地の文献や伝承を基に過去の地震や津波の姿を把握できれば、

社会と研究 接続目指す

理系研究者による規模推定につながられる。文系の研究対象だった人間や社会に目を向け、災害を乗り越える方策を探りたい」

――研究成果の外部への還元が重要になる。

「国内外に研究成果を発信し活用してもらうには、何が求められているかを常にキャッチしなければならぬ。社会と研究を接続するため、研究所全体をマネジメントする部門も設けた」

――被災地の研究所への期待は大きい。

「防災、減災の思想やシステムを社会の隅々までに組み込むのは簡単ではない。だが、高い志と強い危機意識を持つ研究者が集まった。多大な犠牲に報いるためにも震災の経験や教訓を一つたりとも無駄にせず、研究を加速させる」



災害科学国際研究所の使命について語る平川教授

震災教訓 無駄にしない